

## 保育所実習に関する調査研究からの考察

— 実習現場における指導の実態を中心に —

前 川 頼 子

A View from Studies of Practice of Education in the Nursery School

— Aactual Condition of Teaching at the Scene of Practical Training —

Yoriko Maegawa

キーワード：実習生の不安、保育所実習、保育士養成、質問紙調査

### 1. は じ め に

本学の、幼児教育保育学科における「保育実習」は、保育士資格取得するために必須の科目である。学生にとってこの実習は、単位取得という第一義の目的以外にも大きな意味を持つ。その1は、本科の学生は子どもと関わる仕事を目指しているとはいえ少子化社会で育っており、保育実習は普段関わることのできない乳幼児や保護者を身近に見て話したり関わったりできる貴重な場だからである。また、その2としては、授業で学んだ理論や技術を有機的に結びつけて行う子ども理解を実践するチャンスだからである。このことは大学では実施し難く、実習が不可欠とされる理由でもある。

保育所は保育実習を、学生が保育の実践を観察・体験することで、専門職の目的・価値・倫理などについて理解と自覚を深め、保育者としての使命感や実践力の基礎をいっそう高める場として機能するもの<sup>1)</sup>と位置付けている。

本学でも、どのようにすれば各教科全体の知識、技術の理解が現場で具体的に実践に応用でき、目的を達成できるようになるかについてさまざまな試みがなされている。しかし、学生の中には、それ以前に実習が近づくと強い不安を持ち、実習を辞退したり、実習に行ってはみるがすぐに中断したり、休学する事態に陥る学生もいる。更に、自信を失ったり、想像していた以上に厳しいからと進路変更、あるいは退学する者もいる。

著者は、昨年より実習担当教員となったが、学生の意識や態度の軟弱さは想像をこえるものである。そこで、上記のような不安や動揺の原因を探る意味から、学生の実習前後の意識や保育現場での実習に関する指導・評価などの実態を調査研究することとする。

## 2. 目 的

本稿は、学生及び保育現場での実習に関する実態調査の結果から、実習の事前事後指導の効果的な指導内容や方法について考察し、本学の学生一人ひとりに適した指導、支援への示唆を得ることを目的とする。

## 3. 調 査 方 法

本学の幼児教育保育学科は、1回生の2月3月に保育所・福祉施設実習を1日8時間を10日間、合計80時間実施している。この調査は現在2回生（実習開始時は1回生）130名を対象に、実習直後に行う「保育実習直後指導」の中で調査質問紙を配布し（表1）、授業終了時に回収し

表 1 保育実習調査書（アンケート）

|  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|
| 1. 保育所名<br>どちらかの番号に○をつけて、何歳児担当か書いてください<br>①年齢別（            ）歳 or ②縦割り（主に            歳を担当）  |  |  |  |  |  |  |
| 2. 担当していただいた保育者の方の経験年数は？<br>①初任（1～5年）            ②中堅（5～15年）            ③ベテラン（15年以上）  |  |  |  |  |  |  |
| 3. 指導案は書きましたか<br>① はい（            ）回程度            ② いいえ  |  |  |  |  |  |  |
| 4. 以下のことについて、1～5に1つだけ○を付けてください。<br>①指導案の書き方について（指導案を書いていない場合は、無記入で結構です）<br>よく注意された    1            2            3            4            5            よくほめられた |  |  |  |  |  |  |
| ②実習日誌の書き方について<br>よく注意された    1            2            3            4            5            よくほめられた   |  |  |  |  |  |  |
| ③各年齢の発達段階に合わせた保育をすること<br>よく注意された    1            2            3            4            5            よくほめられた   |  |  |  |  |  |  |
| ④積極的に先輩保育者に質問すること<br>よく注意された    1            2            3            4            5            よくほめられた   |  |  |  |  |  |  |
| ⑤手遊びや保育教材の準備について<br>よく注意された    1            2            3            4            5            よくほめられた  |  |  |  |  |  |  |
| 5. 保育所実習を通して不安を感じましたか。一つ選んで○をつけて下さい。<br>1. 全く感じなかった    2. あまり感じなかった    3. 少し感じた    4. とても感じた   |  |  |  |  |  |  |
| 6. 保育所実習を終えて、達成感がありましたか。一つ選んで○をつけて下さい。<br>1. 全く感じなかった    2. あまり感じなかった    3. 少し感じた    4. とても感じた   |  |  |  |  |  |  |
| 7. 現時点で、保育職に就きたいと考えていますか。一つ選んで○をつけて下さい。<br>1. 全く就きたいと思わない    2. あまり就きたいと思わない    3. 少し就きたいと思う<br>4. とても就きたいと思う  |  |  |  |  |  |  |
| 8. 保育実習を通して、不安に感じたことは何ですか。自由に書いて下さい。   |  |  |  |  |  |  |
| 9. 不安に感じたことについてどのように対処しましたか。自由に書いて下さい。   |  |  |  |  |  |  |
| 10. 保育所実習を通して、学んだこと、身に付いたこと、変化したところは何ですか。自由に書いて下さい。  |  |  |  |  |  |  |

たことから回収率は100%であった。調査項目は、①指導案の書き方について、②実習日誌の書き方について、③各年齢の発達過程に合わせた保育をすること、④積極的に先輩保育者に質問すること、⑤手遊び、教材の準備、の5項目について、成功・不成功の程度を指導者からの評価を尋ねる形で質問した。引き続き5. 実習をとおしての不安。6. 実習を終えての達成感。7. 現時点での保育職志望の意欲、の3項目については主観的な感じ方の程度を尋ねた。さらに、8. 何を不安に感じたか、9. その不安にどのように対処したか、10. 実習を通じて何を獲得できたと思うか、の3項目に就いて自由に記述させた。このような実習中に学生が、困難を感じたと思われる内容に関する調査を行い、その結果は、図3～図11に示した。

アンケート質問項目の作成には、仁志「保育実習の指導の在り方に関する一考察」<sup>2)</sup>を参考にした。

#### 4. 調査の分析及び考察

##### (1) クラスの形態

実習生が配属されたクラスは、図1のように130名中、1歳児クラスが34名、2歳児クラス13名、3歳児クラス13名、4歳児クラス14名、全年齢に配属された学生26名、異年齢クラス30名であった。学生たちには、実習2週間前くらいに実施している現地オリエンテーションにおいて、園長先生や実習担当の先生から園の概要や保育方針等を聞くと同時に、実習中の配属クラスが決まる。学生は、配属された年齢について、発達過程を復習し、養護面や年齢に適した遊びなど改めて保育に関する知識を学ぶのである。具体的には、オリエンテーション当日に、園独自の指導案の用紙や課題曲の楽譜を渡される(受け取る)ケースもある。ここで、「苦手だから…」 「弾けない…」と不安を感じる学生もいる。

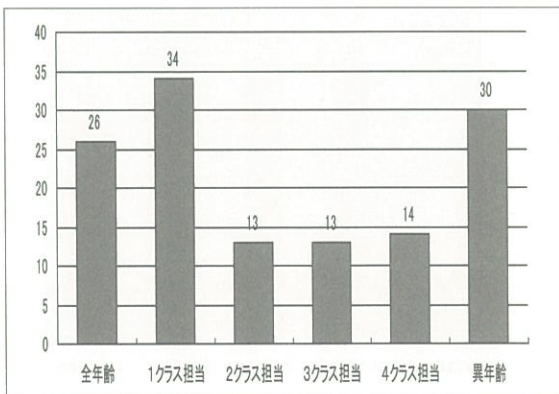


図1 クラス形態

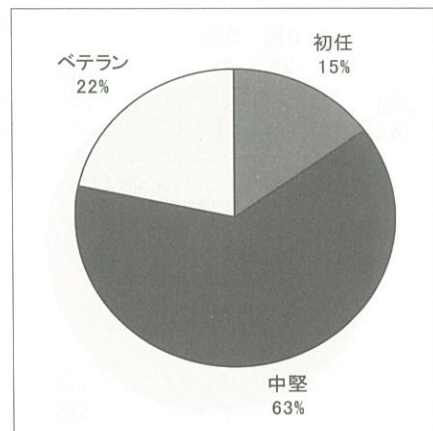


図2 担当保育士の経験年数

(2) 実習指導の担当保育士の経験年数

保育現場における図2担当保育士の経験年数は、初任（1～5年）20名【15%】、中堅（5～15年）82名【68%】ベテラン28名【15%】という結果になった。日々の保育実践に加え実習生への指導を行わなければならないという負担面と、実習指導を行えるという保育の指導力を考慮して、中堅以上の保育士を担当としている園が多いことが窺える。

(3) 指導内容について

実習生の立案による責任実習をするときには、指導案の作成は必須である。しかし、指導案の作成に相当負担に感じる学生がいる。図3のように、1回だけ作成したのが68名（52%）2回作成18名（14%）3回作成9名（7%）作成していない33名（25%）と実習生の作成回数にはばらつきがあった。この実習では、「観察実習」「部分実習」が中心であり、責任実習のような指導案作成まで至っていない保育所も多いが、最低1回は指導案を作成するなど作成回数の基準を設けることが必要と思われる。

年度末の多忙極まる時期に、未熟な1回生の指導案作成を指導することは保育所にとって大きな負担をかけることになるが、指導案作成は学生の貴重な体験であり、将来保育士を目指す学生の心構えなどへの保障につながると考えられる。

5. 実習内容の評価

質問 1. 指導案の書き方

「保育実習Ⅰ」では、担任の先生に代わって保育の一部を担当する「部分実習」があり、時間の長短はあるが、いずれの場合もその保育には計画として指導案を立案して臨む。図4の指導案の書き方で「よく注意された」9名、「少し注意された」50名、「全くなかった」51名（指導案作

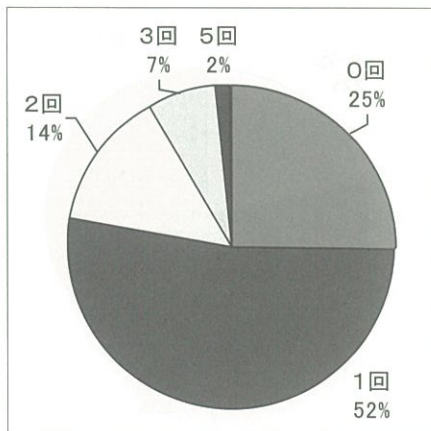


図3 指導案の回数

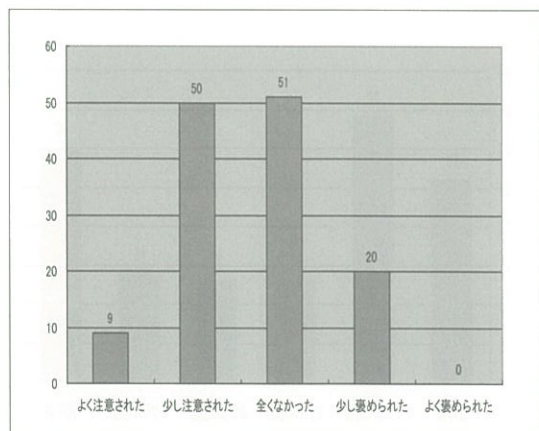


図4 指導案の書き方

成しなかった学生33名を含む)、「少し褒められた」20名であった。指導計画の様式は、その園の保育についての考え方によって異なってくるので実習園で指定された場合は、その形式にしたがって担当の先生の指導を受けるようにしているが、実習生に任されている場合は、本学の様式で書いている。

授業では、指導案の立て方の手順等について、例えば担任の先生に最近の子どもたちの遊び方について尋ねてクラスの状態を把握し、担当の先生が作成した月単位の指導案や週案での活動の流れ、また一日の活動の流れと内容などを確認したうえで立案するように指導している。

実際に実習生の指導案が書き上がると担当の先生に見てもらうが、何度も書き直しさせられたと自信なさそうに報告して来る学生も多い。また、実際の保育は計画通りいかない事が少なくない。計画したように出来なかったと焦りの言葉すら聞かれる。立案の完成度を求められているのではなく、書き直し、指導されることが実習生にとっての大きなメリットである事を知らせ、注意を励ましと受け取るように指導している。

質問 2. 実習日誌(ノート)の書き方・3. 先輩保育者への質問

保育実習に臨むにあたり実習生には「私の課題」として、実習に対してのどのような目標を持って臨むかを文章に表す指導をしている。その目標に照らし合わせながら実習の体験を客観的に記録していくのが日誌(ノート)である。その課題は実習初日に園に提出されるので、まわりの先生方は「私の課題」=「ねらい」に沿って実習生の行動を見ている。それだけに、課題を明確にした目標や、それに照らして実際の保育を見て感じる疑問点が実習日誌に出てこなくてはならない。図5の実習日誌の書き方で、「よく注意された」16名、「少し注意された」50名、「まったく注意されなかった」30名、「少し褒められた」7名、「よく褒められた」6名であった。

この結果から、実習日誌は毎日書き、毎日提出して指導を受けるが、指導者が忙しくて、その都度指導欄に記入していただけない場合があるので、「全く注意されなかった」とある回答はこ

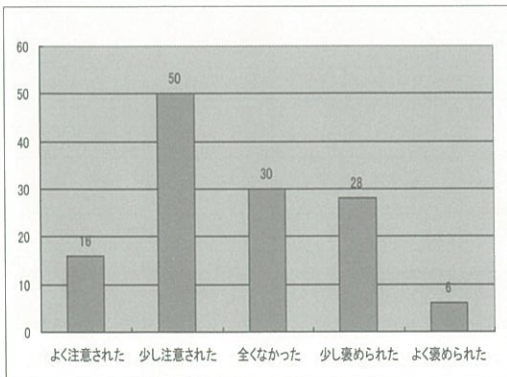


図5 実習日誌の書き方

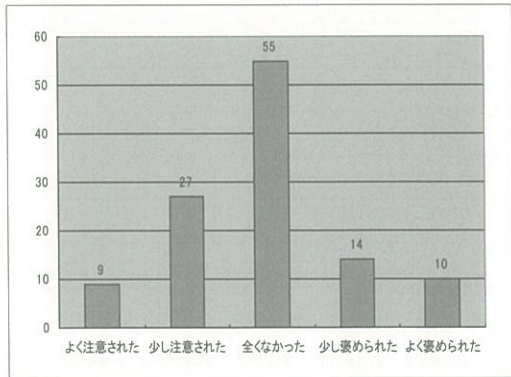


図6 積極的に質問する

のような場合も含まれていると考えられる。

さらに、観点を持って保育を見ることによって、疑問点や自分にできないことが明らかになった事について先生方に直接質問することで担当の先生から指導を受けることが出来るが、実際、実習中に実習生が積極的に質問することが、全くなかった学生が55名もいた(図6)(質問に関して注意されなかった学生数をも含む)その事から実習に対する緊張感と質問するタイミングがつかめないまま実習を終えている様子が窺えた。分からない事があれば、保育中なら手短かに担任に質問するように、質問が長くなりそうなときは保育終了後改めてゆっくり聞くように、など事細かに指導していかなくてはいけないのかと反省する。

#### 質問 4. 発達過程に合わせた保育

実習園側とすると保育実習Ⅰという初回の実習であるためか、各年齢の発達に応じたかかわり方はそれほど重視されていなかったのかも知れないが、図7「発達に合わせた保育をする」に対しては、「注意が全くなかった」が76名であった。しかし、実習生からは「さまざまな年齢のクラスに入っているので、子どもたちにどのようにかかわったらよいかわからない…」などの反省もあった。大学での授業でも多くのことを学んでいるが、発達のポイントをおさえないまま実習に臨んでいると思われる。大学で学んだ子どもの発達過程と実習でなければ経験できない子どもたちの色々な姿を照らし合わせながら、子ども一人一人の年齢や特徴を捉えていって欲しいものである。

#### 質問 5. 保育実習を終えての不安

図9「保育実習を終えて不安を感じた」68名(53%)「とても不安を感じた」50名(38%)は実習生殆どが不安を感じている結果となった。不安の内容について多い順に示すと次の8項目である。

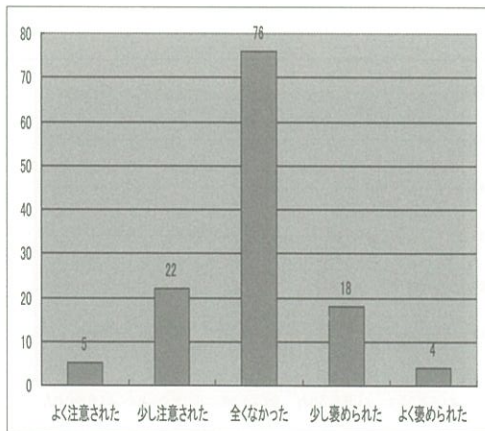


図7 発達過程に合わせた保育

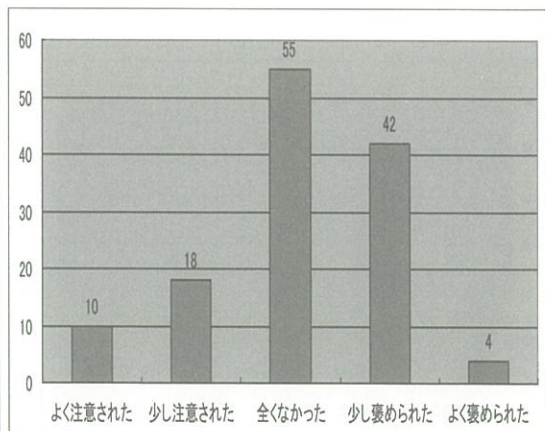


図8 手遊び・教材の準備

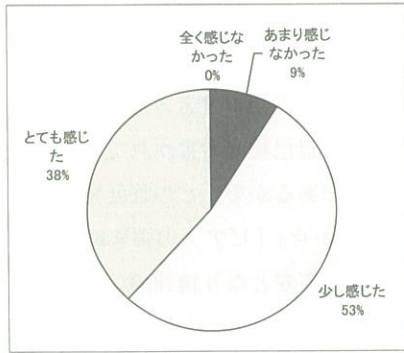


図9 実習を通しての不安

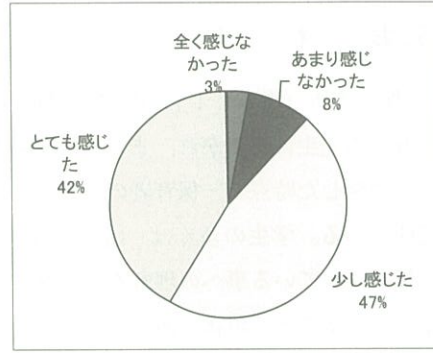


図10 実習を終えての達成感

1. 実習日誌の記録が書けない。
2. 子どもとの関わりの持ち方が分からなかった。
3. 部分実習の進め方
4. 指導案の書き方
5. 保育現場での先生方との人間関係
6. ピアノが上手く弾けない
7. 子ども同士のトラブルでの対応
8. その他 発達の遅れのある子どもの対応 からの人生など

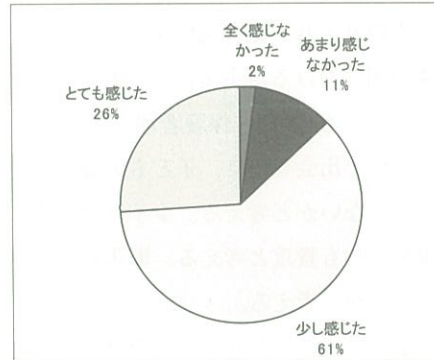


図11 現時点で保育職に就きたい

このような不安を抱えながら体調を崩し、実習を休んで実習期間を延長してもらったり、円形脱毛症になったという学生もいたが、慣れない環境に戸惑いながらも何とか実習を終えた。学生にとっては、自分なりに頑張ったつもりであろう。

#### 質問6. 実習を終えての達成感

学生の中から、実習が大変だったと言う声も聞かれたが、図10「達成感を少し感じた」61名(47%)、「とても感じた」54名(42%)両方を足すと115名(89%)の学生殆どが達成感を味わっている。

その理由は、実習中、自分なりに悪戦苦闘しながらも、前向きな気持で「私ならできる」という意識を持ち、毎日絵本の読み聞かせを練習したり、分からないことは質問し指導されることで改善することが分かり、楽しいと感じられたのであろう。

#### 質問7. 現時点で保育職に就きたい

不安に感じていた学生が多かった中で、図11の現時点(実習を終えて)では保育職に「少し就きたい」79名(61%)「とても就きたい」34名(26%)と幼児教育保育学科に入学して保育者をめざす学生の目標は、この段階では持つ事が出来ている。

## 5. お わ り

「保育実習（指導）Ⅰ」の授業（計画9回・10回目の）「実習課題の書き方」では、小さい頃に保育所の先生にあこがれ、また、子どもが好きだからなどの自己紹介も書かれていた。初めて実習を経験した時点で、保育者の資質や専門性がいかに大切であるかを、どの程度感じ取ったかは疑問である。学生の多くは、「指導案作成」「絵本の読み聞かせ」「ピアノの弾き歌い」など授業で教授されている事への理解不足、練習不足から、それらが不安となり精神的に落ち込む要因になっていることが現状である。

今後、著者は実習担当の教員として、事前授業では実習中に起こりうる事例を紹介するとともに、演習内容も色々な場面で活用できる内容、例えば簡易伴奏による季節の歌やゲームの紹介などを取り入れ、保育現場をイメージできるような演習にしていきたい。また、実習以外にも、近隣の園における自主実習や子どもに関するボランティア活動など、いろいろな形で場数を踏む事が「子ども理解」「保護者理解」につながると思われる。また、そこで目標にしたいと思うような先生と出会ったり、子どもの成長も感じるたりする可能性も高まり、間接的な実習につながるのではないかと考える。少子社会で育った学生には、評価（単位修得）のため保育実習とは違う現場経験も貴重と考える。緊張して指導を受ける保育実習以上に自信に繋がる場面を持てるのではないかと考える。

また、一人ひとりの学生の思い、不安感などに向き合い、課題を乗り越え、保育職への期待意識が育つようにしていきたいと考える。

## 参 考 文 献

- 1) 全国保育士養成協議会「保育実習指導のミニマムスタンダード」p1 北大路書房2007
- 2) 仁志「保育実習の指導の在り方に関する一考察」富山国際大学子ども育成学部紀要  
第1巻 pp110-117 2010